

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 26 回 第 7.3.3.1 節～第 7.4.4.2.2 節

2019 年 1 月 15 日

小 田 勝

201 頁「7.3.3.1 過去推量」から。用例(4)の類例を追加する。

- ・ 山の名と言ひ継げとかも 佐用姫がこの山の上に領巾を振りけむ (万 872)

202 頁「7.3.3.2 伝聞の「けむ」」。次例は、中古なら「ありけめ」というところだろう。

- ・ 昔こそ我が朝に吉備大臣はあり てんなれ。(平治) <新大系 263 頁>

中古語の文法に逸脱しているが、分析的に表現しようとする現れだろうか。次のような例は、婉曲といわれる用法である。

- ・ [尼君ハ源氏ニ] なづさひ仕うまつり けむ身もいたはしう、かたじけなく思ほゆべかめれば (源・夕顔)

「7.3.3.3 つらむ」の 203 頁の◆について。次例の「つらむ」も現在の事態を表しているようにみえる。

- ・ 待ち明かす我をば知らでほととぎすいかなる里に 朝寝しつらん (為忠家後度百首)
- 次のような「つらむ」は、ほとんど単独の「つ」と変わらない。

- ・ さりとも命ばかりはと思ひてこそ心つよくも見ざりしか。…最後に 今一度見ざりつらんこそ口惜しけれ。(保元・金刀比羅本)

203 頁「7.3.3.4 ぬらむ」では、用例を追加する。

- ・ 面影は我が身離れず立ち添ひて都の月に今や寝 ぬらむ (明月記・建仁 2.6.11)

なお、本書で『明月記』の本文は国書刊行会叢書を使用していたのだが、これを冷泉家時雨亭叢書別巻『翻刻明月記』に変更する(ただし既刊は嘉禄 2 年まで)。上例もこれによっている。

「7.4.1 反実仮想の標準形」(節は 203 頁から始まる)では、206 頁用例(15)の類例を追加しておく。

- ・ かからむとかねて知り せば 大御船泊てし泊まりに標結はましを (万 151)

- ・昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて行ひ（＝勤行）を
せましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。（更級）

「ましかば…ましき」の例もある（→§7.4.4.2.3）。

- ・さらましかば、かの仙人の住処をば見てましきと詠めるなり。（俊頼髓脳）

用例(15)は過去の事態であるが、未来の事態に用いられた「まし」もある。

- ・神岳の山の黄葉を 今日もかも問ひ給はまし 明日もかも見し給はまし（万 159）

〈題詞「天皇崩之時、大后御作歌」〉

「事実の存在しない未来に「反事実」はあり得ない」と思うかもしれないが、「亡くなった彼がもし生きていたら、明日のイベントには喜んで参加したるうに。」のように、「実現可能性が全く無い未来の事態」を仮想することはあり得るわけである（山口堯二 1968 参照）。

206 頁「7.4.2 反実仮想の標準形のバリエーション」。次例は、短連歌で、反実仮想の「…せば」と言いかけ、付句の方でそれに「…まし」と応じた例である。

- ・進、月いと飽かずなるほどに、しのぶる中将

なかなかこよひの月のなかりせば

とあれば、うちに

空に心の浮かばましやは（大斎院前の御集）

208 頁用例(14)～(16)について、反実仮想の形式で反実の含意のない例があるから、次の節を新設しよう。

7.4.2' 反実仮想の句型で反実を含意しない例(新設)

反実仮想の形式で反実の含意（「しかし実際は〔前件〕ではないから〔後件〕ではない」）のない例がある。[208 頁 1 行目～15 行目をここに移し、用例(14)を用例(1)、用例(16)を用例(2)とする]

次のような偶然条件の仮定文は、前件は反実であるが、後件に反実（ほととぎすが鳴かなかつた）の含意はない。

- (3) 筑波嶺に我が行けりせばほととぎす山彦とよめ鳴かましやそれ（万 1497）〈題詞

「筑波山に登らざりしことを惜しみし歌一首」>

また、逆接仮定条件の主文の事態は、条件の事態の成立と無関係に成立する（例えば順接仮定条件「雨が降るなら行く。」の後件は雨が降らないと成立しないが、逆接仮定条件「雨が降っても行く。」の後件は雨が降らなくても成立する）から、**逆接仮定条件下での反実仮想の文**は、一般に反実の含意がない。[208 頁用例(15)を用例(4)とする]

(5) 鳥辺山君たづぬとも朽ち果てて苔の下には答へざらまし (千載 1144) ←210 頁
用例(16)

(6) [実際ニ] いにしへの別れの庭 (= 釈尊入滅ノ場) にあへりとも今日の [涅槃会
ノ] 涙ぞ涙 (= ソノ時ノ涙ト同ジ) ならまし (後拾遺 1179) <詞書「山階寺の涅槃会
にまうでて詠み侍りける」> ←210 頁用例(15)

(5)(6)は「実際は君が鳥辺山を訪ねなかったので、苔の下で答えた」、「実際は今日の涙は涅槃を悲しむ涙ではない」を含意しない。

208 頁「7.4.3 従属節中の反実仮想形式」、用例(1)(2)の類例を追加する。

・ 散りぬとてなどて桜をうらみけん散らずは見まし今日の庭かは (拾遺愚草)

次例は、連用修飾句が反実仮想形式になっている。

・ 神垣にしるしの杉のなかりせばまどひぬべくも降れる雪かな (為信集)

209 頁「7.4.4.1 前件が非標準型」(節は 209 頁から) の 210 頁の用例(15)(16)を、
上記に新設の第 7.4.2' 節に移す。

211 頁「7.4.4.2.2 後件が「む」「じ」「けむ」の用例を追加する。

・ 待ちかねて臥しなましかばあしひきの山ほととぎす夢にこそ見め (為忠家後度百首)
次例は、後件が「むず」の例である。

・ 頼朝対面し給ひて、「最前も下向したりせば、しかるべき所をもたばんずるに、
今までの遅参こそ力なき次第なれ。…」とて (平治・古活字本)

[引用文献追加] 山口堯二 1968 「「まし」の意味領域」『国語国文』 37-5